

研究主題 石川県と第1次上海事変

要約： 郷土部隊である金沢第九師団が、主参加した第1次上海事変（1932年）は、石川県民にとって十五年戦争（満州事変、日中戦争、太平洋戦争を含む）の始まりであった。金沢第九師団の出兵と同時に、県民の軍への協力度や体制が一変するとともに、上海では手強い中国軍の反撃によって予想をはるかに上回る大苦戦（実質的には敗戦）となり、日本で最も多い戦死者を出すこととなった。石川県民は、上海で中国軍といかに戦い、銃後の県民にどのような影響を与えたかを、未活字化の一次史料や関係者に対しての聞き取りにより、新たな正しい事実も調べて考察し、高等学校の日本史教育および郷土史学習の教材とする。

キーワード： 第1次上海事変、金沢第九師団、満州事変、国際都市上海、五・一五事件、空閑昇少佐。

I はじめに

(1) 研究事項選択の理由と目的

石川県民として郷土の歴史や人物の活躍を知りたいが、特に私の親戚では、3名が昭和7年（1932）の第1次上海事変に参加している。伯父をはじめとして年配の旧軍人の方々が、「わしゃ満州事変から15年も戦争にいった」と言う話を、幼少期に私はよく耳にした。

ただし石川県民の郷土部隊である金沢第九師団は、満州事変には直接参加していないので、満州事変期の第1次上海事変を満州事変と拡大解釈して石川県内では呼んでいた人が多い。

そして以前、石川県立歴史博物館内のキネマシアターで、昭和7年2月の「第1次上海事変での第九師団の出兵記録の映像」を見て、金沢をはじめとした石川県内での郷土部隊である金沢第九師団将兵を各所で見送る県民老若男女総出の熱烈な様子に、私はとても感動した。

石川県民にとって実質的な十五年戦争の始まりは、第1次上海事変であり金沢第九師団が主参加し、県民の戦死者が日本で最も多いので、関わりとその影響を調べて考察したい。

特に、①石川県民ははじめから軍への理解や支持が著しかったのか。②県民は上海で具体的にどのような戦いをおこなったのか。③県民の銃後はどのようなものであったか。④県民への影響はどのようなものであったか。⑤さらに、同時期の五・一五事件の犯人減刑嘆願署名数は石川県が全国で1位（人口比）であり、しかも2位の神奈川県（横須賀などの海軍基地を持つ）を、きわめて大きく上回った特異な現象との関わりはどのようなものであったか。

以上五点を調べて考察したい。

そして、日本史や石川県史で最も大切な「十五年戦争（満州事変、日中戦争、太平洋戦争を含む）」の始まりと事実を知るための教材としたい。

(2) 文献史料および聞き取り調査について

主に使用する文献史料（一次史料）は、以下である。

- ①石川県支那事変出動軍人並遺家族慰問会編『日支事変録』石川県、1933年9月
- ②野田勝久編『第一次上海事変における第九師団軍医部「陣中日誌」』十五年戦争極秘資料集補刊5 不二出版、1988年6月 未活字化史料
- ③『第九師団山砲兵第九連隊第八中隊日誌』、1932年4月完成 未活字化史料

さらに、関係者への聞き取り調査では、第一次上海事変で活躍し重傷して人事不省となり中国軍の捕虜となった後に帰還し、自決して日本中で話題となった金沢第九師団歩兵第七連隊第二大隊長の空閑昇少佐の郷里（佐賀市）で、長男（空閑正和氏77歳）に対してもおこなった。

II 内容の概要

(1) 第1次上海事変の概要

昭和6年（1931）9月18日満州事変が勃発し、中国東北三省の主要都市は日本軍の占領するところとなった。中国は国際連盟に日本の侵略を提訴する一方、日本貨幣ボイコット運動を全国的に展開し、日本の中国輸出に重大な打撃を与えた。

国際都市上海は中国最大の貿易港で排日運動の中心になっていたが、昭和7年（1932）1月18日日本人日蓮宗僧侶らが中国人に襲撃され三名が重傷を負い、うち一名は死亡するに至った。

戦後（1945年以後）田中隆吉が自ら認め公表したことであるが、この襲撃は、満州から列強の目をそらすために、関東軍の板垣征四郎の依頼で上海の公使館付武官輔佐官田中隆吉少佐が計画し川島芳子らを使い実行したが、当然当時の大多数の日本人は中国人の仕業と信じていた。

『日支事変録』の序文では「〔中略〕1月以降我が居留民の保護並租界防衛に関し支那側の国際義務不履

行のため上海事変の勃発となり、茲に突如として我第九師団に動員令発せられ管下将兵は勇躍遙か上海の第一線に出動した。正義に立脚する權益擁護と同胞保護のために皇軍は、陸海軍協力一挙支那軍を膺徴し、皇国日本の光輝を世界に宣揚し更に進みて国際正義に対する帝国の公正なる態度を開明して国威を中外に發揚するを得たり。〔中略〕とある。

さらに、『第九師団山砲第九連隊第八中隊日誌』の冒頭では「昭和七年一月十八日午後四時上海日本人僧侶三友社支那職工ヨリ暴行ヲ受ケシヲ直接原因トシテ上海ノ暗雲遽カニ險悪ヲ告クルヤ〔中略〕」とある。

1月28日より日本海軍陸戦隊1,820名は、中国軍約35,000名と上海の市街地で苦戦を余儀なくされ、犬養内閣は2月2日上海への陸軍の派兵（金沢第九師団・久留米混成二十四旅団）を決定したが、短い準備期間で資材や人員が不足していた。

日本陸軍は有史以来初めて上海に久留米混成二十四旅団は2月7日から、金沢第九師団8,866名は2月14日から上陸し、2月20日から九師団長植田謙吉を司令官として第一次総攻撃を行ったが、中国軍は頑強に抵抗したので予想外の苦戦をし、日本軍の損害は甚大となり、「爆弾三勇士」「空閑昇大隊長奮戦後、重傷となり捕虜となる」など生じた。

2月23日日本政府は、第九師団だけでは兵力不足と判断し、さらに第十一・第十四師団の2個師団（当時の日本は12個師団しかなかった）の増派と、新たに上海派遣軍（司令官白川義則大将）の編成をみた。

2月25日からの金沢第九師団・久留米混成二十四旅団による第二次総攻撃もうまくいかなかった。

満州国建国宣言された3月1日からの金沢第九師団・久留米混成二十四旅団による第三次総攻撃も第九師団第七連隊長林八大佐が戦死するなど苦戦したが、新たに上海の中国軍の背後に第十一師団が上陸すると同時に、中国軍も動揺し上海租界周辺から撤退し始めたので、白川司令官は3月3日、戦闘中止を声明した。この間戦死傷者は、日本軍三千九十一名、中国軍一万四千三百二十六名に及び、また一般市民の死傷・行方不明も二万名に達した。

第1次上海事変では学生・市民が中国軍を積極的に支援し、満州事変での軍閥が自己勢力保存のため戦闘に消極的であったのとは明らかに異なる新しい抵抗戦のタイプを示し、列国の注目するところとなった。陸軍は、主に上海北方のクリーク（用水路）地帯の鎮（小部落、江湾鎮等）で戦闘し大苦戦した。

なお 第1次上海事変期の石川県の様子は以下である。

金沢商工会議所の調査によれば、金沢周辺の労働者の賃金は、大正11年（1922）を100とす

ると、昭和4年（1929）に88となり、昭和5年（1930）には60まで低落した（『大阪朝日新聞』石川版、昭和6年1月20日）。

しかし職にありつけるのはまだよく、大量の失業者が巷にあふれた。当時の新聞の見出しに、「金沢へなだれ込む失業者の群れ」（『大阪朝日新聞』石川版、昭和6年2月4日）、「給料を払へぬ町村があちこちに出る」（『大阪朝日新聞』石川版、昭和6年1月6日）、などがある。石川県では、昭和恐慌の影響は農村でより悲惨な状況としてあらわれた。

昭和7年（1932年）の石川県下の農家の負債総額は5,835万円にのぼった（農林省『本邦農業要覧』昭和15年度版）。同年の農業戸数は81,815戸（加用信文監修『都道府県 農業基礎統計』）であるから、一農家当りの負債は713円となる。

当時の一年間の農家の総所得（全国平均）は、自作農837円、自小作農698円、小作農579円（農林省経済更生部『農家経済調査』昭和5年）という時代であるから、この713円という負債額はそう簡単に返済できる金額ではないので、いかに苦しかったかがうかがえる。さらに、漁業で生計を立てていた村は、より一層窮地に追い込まれていた。

例えば、大阪毎日新聞社経済部『生にもがく農村』（昭和七年判）のなかで、石川県河北郡内灘村を代表的な生にもがく漁村として「食うべき何物も持たず、耕さうには土地がなく、その上に貨幣収入から見放された漁村の惨状は目もあてられないひどさがある。」と悲惨さを伝えている。

このように昭和恐慌の影響で、昭和7年（1932）の第1次上海事変期は石川県民の生活はかなり厳しい状況であった。

（2）本論文の内容と影響のまとめと考察

①石川県民ははじめから軍への理解や支持が著しかったのか。

昭和6年（1931）9月18日勃発の満州事変前の8月から12月まで、石川県内では第九師団を中心に軍国思想の普及のため、8月着任した満州通（支那通）と言われた林第七連隊長による50数回の講演会や飛行機からのピラマキ、ラジオ放送による訴え、市街地での模擬戦闘や各地での国防展の開催など最大限の努力と工夫をしたが、他県と比較して盛り上がらなかったのが第九師団としては不満足であった。（青訓入所率は石川県が最劣等であった。）

理由は、・第九師団は、満州事変に出兵していないので戦争に対する実感が足りないため。

・満州事変自体戦死者が少なく危機意識を強く実感できないため。・昭和恐慌のための能登を中心とした石川県の貧困が、積極的な盛り上がりを見せなかったため。（特に鳳至郡は63,9%の納税率であった。）

以上の三点が考えられる。

昭和7年（1932）1月28日の海軍陸戦隊の交戦から始まる第1次上海事変では、2月8日の金沢からの金沢第九師団出陣時点で、石川県内はかなり盛り上がっていた。

この盛り上がりは新聞やラジオなどのマスコミ報道の影響は意外に大きくない、なぜならば、軍事機密のため第九師団の上海上陸の2月14日まで出陣などは一切報道されなかったからである。

2月8日の金沢第九師団出陣時点で盛り上がっていた理由は、・新聞報道を通して第1次上海事変での海軍陸戦隊の大苦戦で、犠牲を伴う危険を多少実感していたため、・2月2日からの第九師団の応召動員により、石川県各地の小学校や各駅で応召軍人の盛大な歓送会が開かれ、明治時代の日露戦争での出兵以来の盛り上がりがあったためである。

以上の二点が考えられる。

なお第1次上海事変前の石川県の大きな特色として、特に郷土部隊である金沢第九師団が参加するまでの石川県内は、

第九師団によって、小学校の教員にまで「小学校の先生に国防観念を吹込む 明日男女教員に小林少将の講演 徐ろに児童へ普及をはかる」（『北国新聞』昭和6年10月23日）など様々な努力がされたが、「笛吹けど踊らず 金沢人は国防に冷やかさざる 小林少将かたる」（『北国新聞』昭和6年11月22日）「九師団の積極的国防運動に対して地方民が比較的冷淡なのは実に心細い、他の師団管下では師団そのものの運動より地方民の運動が激しく、実に凄まじい、大学や専門学校の満蒙観察や、いたいけな小学生の国防祈願、さては青年団、婦人会等の国防献金募集、その他国民大て仲々熱心な活動振りだ、これに反して当地方はどうか一つ学生自身が自発的に運動をやったこともなければ、青年団や婦人会が動いたこともない、全く在郷軍人の活動に任し切りの状態で、テンと煮え返らない、こんな事では決して誇るべき九師団管下の地方民ということは出来ない『笛吹けど人踊らず』だ〔中略〕まあ、兎に角師団では地方に対して運動の徳憑をなすがもっと、此の重大な時局に際し地方民自身の奮起をのぞむ次第」と言った状態であった。

② 県民は上海で具体的にどの様な戦いをおこなったのか。

特にA「衛生隊」B「山砲隊」C「歩兵隊」に所属する石川県民が、上海で具体的にどの様な戦いをおこなったのかを調べた。

(A)「第九師団衛生隊」の具体的な行動について。

第1次総攻撃は、「江湾鎮付近ノ敵ハ頑強ナル抵抗ヲナシ第一線ハ予定ノ如ク推進セス〔中略〕午前11時10分江湾鎮正面ニ死傷続発ノ報アリ。」とあるように予想外の苦戦で、それにともない医療材料

なども不足（本日一箇師団ノ平病一箇月及び一会戦分ノ衛生材料追送方電報ス。）し、第3次総攻撃でも「傷者ハ、呻吟シ救ヲ求ム」状態であった。

「〔中略〕死体、傷者多数アルモ衛生隊担架中隊ハ猛烈ナル敵火為前進意ノ如クナルアス未タ収容シ得ストノ報告アリ」や「診療給養上ノ苦心経営ハ言語ニ絶スルモノアリ〔中略〕」という有様で、大苦戦とそれにともない戦死者や負傷者の運搬や医療処置の苦労がうかがえる。これは軍閥相手の満州事変での楽勝経験から、中国軍を甘く見すぎていたからではないかと思う。

例えば、『北国新聞』昭和6年9月23日記載の記事で、「林七連隊長に吉林放談を聴く 頑張る支那軍がザッと五万 強そうでも武器が役立つ」とある。林連隊長は満州吉林省の張作相將軍の軍事顧問として約八年間の間重要任務を努めていた。

附近の村落から便衣隊（ゲリラ）からの射撃を頻繁にうけたので、「附近部落ヲ掃討シ其抵抗セル便衣隊多ク射殺家屋ニ火ヲ放チテ巢滅ス。」という対応をおこなっていたことが、うかがえる。

「敵ハ堅固ニ構成セラレタル陣地内ニ蟄吹伏シ其行動ハ活発ナラサルモ頑強ニ抵抗シアリ、俘虜ノ言ニヨレハ我攻撃特ニ飛行機ノ為極度ニ士氣沮喪シ戦意乏シキカ如シ。」とあり、

中国軍が「堅固ニ構成セラレタル陣地」（トーチカ）で頑強に抵抗する様子がうかがえる。さらに「俘虜ノ言ニヨレハ我攻撃特ニ飛行機ノ為極度ニ士氣沮喪シ戦意乏シキカ如シ」とあるように、中国軍の捕虜に「日本軍の飛行機からの効果があり、中国軍の士気を奪い極度に戦意を低下させている」と語らせていることから、飛行機からの攻撃（爆撃）の効果が大いことと、捕虜が重要な機密を語らされていることの二点がうかがえる。

(B)「第九師団山砲兵第九連隊第八中隊」の具体的な行動について。

山砲の役割は、敵陣地（掩蓋＝トーチカ）の破壊と敵兵の殺傷である。対敵陣地（掩蓋＝トーチカ）の破壊には榴弾を使用し、対人殺傷には榴霰弾を使用している。

飛行機との協力すなわち偵察結果を利用しての山砲の砲撃は、効果があったようだ。

榴霰弾は、敵の頭上で爆発させ兵を殺傷する、特に敵が退却する際に、追撃として発射し「集中射撃ニヨリ敗退スル敵兵ヲ見ルニ 何レモ白キ蒲団ノ様ナモノヲ背負ヒ 或ハ天秤棒ニテ擔キ又ハ逆ニ擔ヒ散乱ノ体ナリ 之ヲ射撃スレハ右往左往遂ニ遁走ノ道ヲ失セルカ如キ 実ニ笑止ノ至リナリ 又彼等ノ後方ニ担架ノ往復盛ナルヲ見ル蓋シ損害甚大ナリシナラン」という有様であった。

第九師団山砲第八中隊では、西野上等兵が負傷（後

日戦死)したので、「自ラ緊張シ敵愾心湧ケリ」という状態となった。

(C)「第九師団歩兵第七連隊第二大隊」の具体的な行動について。

2月20日の第1次総攻撃は、予想外の苦戦であったため、急きよ歩兵第七連隊では敵陣地深くへの奇襲攻撃により、突破口を開こうとする作戦をたてての第七連隊第二大隊(空閑昇大隊長以下200名)による奇襲攻撃は失敗し中国軍に包囲され、「残兵三十余名は、三日二晩ほとんど不眠不休、絶食無飲の苦闘」を続け、「20メートル先から手榴弾」も投げこまれ戦死者続出の凄惨な有様であった。

③ 県民の銃後はどのようなものであったか。

石川県内では、金沢第九師団動員となるとともに県民が49団体(内28団体は婦人会)の国防(戦争)協力団体を組織し、団体の活動だけでなく個人的にも献金や慰問などに積極的に協力し、出動軍人を物心ともに支えたと言える。そして、いわゆる「銃後の美談」は、多数発生した。

④ 県民への影響はどのようなものであったか。

石川県民がきわめて軍に協力的になるなど、第1次上海事変が石川県民に与えた影響は大きかった。そして、「全国各県中最も盛な石川県下の国防運動」は、陸軍の満足するものとなるなど県内は一変した。

⑤ 同時期の五・一五事件の犯人減刑嘆願署名運動との関わりはどのようなものであったか。

・第1次上海事変と同様に石川県内の諸矛盾や不満(農民・漁民の生活苦、朝鮮人差別、特権階級や既成宗教への批判など)のはげ口となっていたこと。

・計画の中心であった藤井齊海軍大尉が上海事変で戦死した英雄であり、実行の主犯三上卓海軍中尉も上海事変に参加活躍したことが新聞で報道されたことも含めて、連日にわたる同情的で英雄扱いする新聞報道があったこと。

・軍人が事件を起こしていること(軍人は第1次上海事変参加軍人と同様で、正義のためには自己犠牲心を持って実行し、皇室を尊重していると思われた)。

・減刑嘆願運動は、右翼団体が主導はしているが、第1次上海事変を契機に活発化していた「廃兵団および在郷軍人」の有志や朝鮮人も協力した。

したがって、第1次上海事変が石川県内の五・一五事件犯人の減刑嘆願運動に与えた影響は、大きいと判断できる。

第1次上海事変には、私の伯父が参戦し、妻の祖父も参戦(本論文でも取り上げた山砲隊の桜井仁三郎一等兵)して傷痍軍人となっている。「正義の戦い」と信じて、死の危険もかえりみずに「自己犠牲心」を持って戦った兵士の方々と、それをささえた銃後の県民に対しては、とても尊敬の気持ちを抱けるとともに、私はより一層石川県への郷土愛が深まった。

Ⅲ 「石川県と第1次上海事変」を、どの様に教材として使用するか。

学習指導要領の趣旨にもとづき、「日本史B」「日本史A」の授業および「総合的な学習」の時間において、教材として使用する。

(1) 目的

①興味を持つ。

(日本史、郷土の歴史や人物)

②一次史料を読む。

(当時の軍隊や軍人の日誌など)

③「十五年戦争」について考える。

(2) 方法

「十五年戦争の始まりである満州事変をきっかけに、日本国内の軍国熱が急激に高まった」が、その具体的な例として、満州事変期の「石川県と第1次上海事変」をとりあげ、以下の①から④の順で行う。

①教師が授業中に視聴覚機器なども使用して、「石川県と第1次上海事変」を、生徒に対して講義することによって、事変の概略を理解させるとともに関心を持たせる。

特に、本論文作成のために調べた資料などをもとに当時の「石川県および県民の視点」から、

「(A)戦争の実態 (B)石川県民の出兵(第九師団)前と後の、軍への協力度の差 (C)中国人・朝鮮人に対する偏見 (D)マスコミ(新聞やラジオ)の影響 (E)自己犠牲心、責任感など当時美德とされたもの{空閑少佐の例など}」の項目を生徒に理解させる。

②生徒による聞き取り調査

(具体的な話を詳細に聞く。)

対象は、祖父母(曾祖父母についても聞く)や、近所のお年寄りなどである。

内容は、(A)昭和6・7年の状況(満州事変期の第1次上海事変に曾祖父または、親戚や近所の人などが参戦したかなど)。銃後で曾祖父母や祖父母などは何をしてきたか。(B)十五年戦争期(満州事変、日中戦争、太平洋戦争を含む)、祖父や曾祖父や親戚および近所の人などが参戦したか。銃後で曾祖父母や祖父母などは何をしてきたか。

③授業中に分けた小グループ内で、生徒は「聞き取り調査したこと」や、「講義で学習したこと」および「配布された資料」などをもとに、「石川県と第1次上海事変」と「十五年戦争」だけでなく、上記の「石川県および県民の視点」からの項目についても話し合い、調べたことや出された意見をまとめた後、各グループごとに発表する。

④まとめとして、第1次上海事変が石川県や十五年戦争などにどのような影響をあたえたかを、生徒が自分で考えて作文を書き上げる。